ひっそり静かに生きていきたい

神様に同情されて異世界へ。頼みの綱はアイテムボックス

3

[author]
於田縫紀（おたぬき）

[illust]
さす

C H A R A C T E R S

カレン

ローラッテの冒険者ギルドのサブマスター。
魔法は使えないが、剣の達人。
スティヴァレ王国の元第二王女。

◆◆◆◆◆

津々井文乃（ツツイフミノ）

神様のはからいで異世界にやってきた少女。
アイテムボックスと自然言語理解、
二つのスキルを持っている。人間不信で、
特に男性とはまともに会話ができない。
趣味は読書。若干中二病の気がある。

◆◆◆◆◆

ミメイ

かなり高レベルな土属性の魔法使い。
フミノと同じくらい他人が苦手。

◆◆◆◆◆

リディナ

フミノと行動をともにすることになった
元メイドの少女。他人との交渉や
家事全般を器用にこなす。読み書きが
できたり、魔法を習った経験があったりと、
複雑な過去を抱えている様子。

◆◆◆

ヴィラル

開拓村の指揮を執るエールダリア教会の司祭。
かつての拷問で身体が不自由になり、
代わりにゴーレムを使役している。

◆◆◆◆◆

セレス

盗賊団に囚われていた少女。
フミノたちに助けられ、行動をともにすることになる。

◆◆◆◆◆

プロローグ　私向きではない街から

私――ツツイ・フミノがこの世界に転移して、大体半年くらい。

『西海岸より人が少ないし、南部は未開発の場所も多いから。魔獣討伐をしながら、のんびり暮らすにはいいと思うよ』

そんな仲間のリディナの発案で、今は魔物討伐をしつつ二人で南へと旅している。ただ旅と言っても毎日移動しているわけではない。

昨日の昼までの一ヶ月近くの間、フェルマ伯爵領のアコチェーノ近辺に滞留していた。これは山越えが辛いとかその他の理由で、私がローラッテまでのトンネルを掘ってしまったのが原因だ。

トンネルを造る前の山越えとトンネル掘削で五日間、冒険者ギルドのトンネル調査や褒賞金処理待ちで六日間。さらにトンネル開通に伴う諸対策を手伝って十二日間。おまけとして諸般の事情で二日間滞在する結果になった。

でも後悔はしていない。そのおかげで、多額の褒賞金、住み心地のよさそうな家、さらにはゴーレムを手に入れることができたから。それにもともと、目的地や期間が決まっている旅ではないし。

昨日の昼過ぎ、そのアコチェーノを出て、途中の山林で家を出して宿泊。今日はアコチェーノを出た後、最初の大きな街であるサンデロントで、情報収集と買い出しをしたところだ。

このサンデロントは、図書館が立派で市場も充実している。ただし対人恐怖症の私向きではない。賑やかすぎて、恐怖耐性（2）で耐えても、精神力がごりごりと削られるから。

私の対人恐怖症は、以前と比べるとだいぶましになった。リディナと出会った頃は状態異常として、対人恐怖（5）がついていたけれど、アコチェーノにいた頃には、対人恐怖（3）まで下がった。スキルの恐怖耐性（2）を使えば、かなり耐えられる。

ただし耐えられるだけで、恐怖がなくなるわけではない。だから買いものや調べものをしてすぐ、街を脱出。半離程度歩いた後ゴーレム車を出して、南へ向けて移動を開始した。

現在はゴーレム車の中で、サンデロントの街で買ったテイクアウトの昼食を食べながら、味を論評中だ。

「どっちのお店も美味しいけれど、個人的には私の昼食亭の揚げ焼きかな。中身はミックスで。フミノはどう？」

「私は薄焼き亭のパンザロット、中身は林檎バターが好み」

テイクアウト探しは半ばリディナの趣味だ。新しい街で買いものをしたときは、必ずその辺の人に聞いて『このあたりで一番美味しいテイクアウト』を買い込む。

この趣味、美味しいし楽しいし、いざというときに役に立つ。食事をゆっくりとれないときなんてのは案外あるものだ。疲れてきちんとした料理を食べられないときもあるし。

それに、人に配ったりするときも楽でいい。この前も、元デゾルバ男爵領の皆さんにほとんど食べられてしまった。だから補充のためにも買いまくったわけだ。

今回購入したのは二店舗。どちらも基本は半月と同じように、具がたっぷり載ったピザを半分に折ったようなもの。ただし仕上げはそれぞれ異なる。

半月はやや厚目でふかふかの生地に具材を載せ、焼いたものを半分に折った料理だ。一方薄焼き亭のパンザロットは、生地で中身を餃子のように密閉し、オーブンで焼いたもの。生地は薄目でパリッとしている。昼食亭の揚げ焼きは、中身を密閉してから揚げたもので、生地の表面はカリカリ。厚さは半月とパンザロットの中間くらい。

私は軽めで甘めのものに惹かれてしまう。パンザロットの林檎味は、生地の中にバターを利かせた焼林檎入りで私好み。バター入りのどこが軽めだ、なんてツッコミはなしの方向で。

一方リディナはがっつり系が好みだ。揚げ焼きはピザのマルゲリータと似た感じの具で、塩漬け肉とトマトとチーズをたっぷり入れて、ラードで揚げている。美味しいけれど、私にはちょい重い。

「あとは、おにぎりをある程度作っておけば、当分は食料の備蓄は大丈夫かな。そういえば新しい調味料を作るって言っていたよね。どんな感じ？」

そうだ、マヨネーズを作るのだった。正確にはツナマヨ入りのおにぎりを。ただその前に試してみたいことがある。思ってもいなかったものが手に入ったのだ。

「調味料の前に試してみたいものがある。うまくいくかどうかわからないけれど」

「それって市場で買った、あのカサカサの黒っぽいやつ？　マウロとかいう」

「そう」

乾燥させた海藻で、西海岸の南の方で食べられているらしい。使い方は、スープに入れたりサラ

ダに入れたり。しかし私の目にはこの海藻が岩海苔に見えたのだ。ならば日本人として、板海苔が作れるか試してみねばなるまい。

板海苔の作り方は確か、簀子に薄く広げて乾燥させればよかったはずだ。しかし簀子なんてものはここにはない。代わりに魔法を使おう。

金属製のバットに、水で戻した岩海苔をできる限り薄く均一に、穴ができないように伸ばす。当然そのままでは綺麗に乾かない。だから水属性レベル2の水分除去、つまり乾燥魔法で丁寧に乾かす。

さて剥がれるか。大丈夫、ちゃんと剥がれた。思ったよりいい感じの出来だ。

「その黒い紙みたいなの、料理に使うの？」

「そう。おにぎりや寿司の必需品」

そうだ、これで太巻きを作ろう。それも刺身や他の具材をたっぷり入れた豪華なやつを。日本にいた頃、節分が近くなると馬鹿高い値段で売っていたような。

そのためにも、まずは板海苔を量産だ。広げて乾かし剥いでと……

「フミノ、ゴーレムを操縦しながらで大丈夫？　やり方がわかったから私が作るよ」

少しゴーレム車がふらついたことに気づかれたようだ。周囲に人がいないとつい運転もいい加減になる。ここはリディナにお任せして、私は安全運転に専念するとしよう。

「お願い」

「買ったマウロ、全部この紙みたいなものにしていいの？」

ちょっと考える。海苔のお吸いものも欲しいかな。

「今日はとりあえず十枚でいい」

「わかった。作っておくね」

欲しいのは、おにぎりと握り寿司と太巻き。ついでに細巻きもリディナにお願いしようか。

魚系の具材は、刺身に漬けにネギトロにツナマヨ。マグロはなかったけれど、鰹っぽい、いい感じの魚が手に入った。他にもブリっぽいのとか、鯖っぽいのとか、マトウダイに見えるやつとか。

魚以外の具材は何がいいだろうか。厚焼き玉子は必須だ。きゅうりっぽいのとアスパラっぽいのは購入したから是非使いたい。かんぴょうはさすがになかったが、似たような瓜を買ったので今度レッツ自作。でも次回かな、使うのは。

もちろんマヨネーズも作らないと。まずは日本風のを作ってから、リディナに相談してみよう。ひょっとしたらこの国にも、同じようなものがあるかもしれないから。

この辺では東海岸と平行に、南へ向かう街道が二本ある。メインの街道と旧街道だ。最初は海沿いの低地に旧街道が作られた。古い集落は海沿いに点在しているから、旧街道は結構使われていた。

しかし一昨年の冬、そこそこ大きな地震が発生。この辺は津波でかなりの被害に遭った。人死にが出なかった村でも、家や畑が海水に浸かって使用不能になった。人々は海沿いの村を捨てて台地の上へ移住。結果、新たに太くてまっすぐの道が、海から離れた場所に作られた。

今では、ほとんどの人が新しい方の街道を通る。古い方の街道も残ってはいるけれど、村人などが海に出るために一部の区間を使う程度のようだ。

しかし私たちが行くのは旧街道の方。人が通らないし、魔物や魔獣が出そうだから。それに馬車と比べると、このゴーレム車は小回りが利くし力もある。遅いけれど、多少道が荒れていても問題ない。

今のところ、発見した魔物や魔獣は小物ばかり。しかし小物でも数をこなせば、そこそこの儲けになる。だから日々の生活費のためにも、狩りはしておきたい。

あと旧街道を通ってみると、それ以外のメリットもあった。海に近い分、景色がいいのだ。

「何かいいよね。こんな場所をのんびり旅するのって」

「同感」

ちなみにリディナは、板海苔を作り終えたので、マヨネーズ作りに挑戦してもらっている。卵黄二個分と酢を少し、塩少々と水飴を隠し味程度に混ぜてオリーブ油を加えつつ、攪拌魔法で混ぜまくるのだ。

「このちょっと黄色いのがもったりしてきたら、完成でいいの？」

「そう。生魚か生野菜に少しつけて味見をしてみて」

これでツナマヨはできる。エビマヨもいい。エビはサンデロントの市場で大量に購入。車エビよりやや小さい白っぽいエビだ。この辺のエビはこういう種類が主らしい。イセエビっぽいのがあれば個人的に欲しかったので、なかったのは残念。

「あ、美味しい。この前のスティックサラダのソースに少し似ているけれど、こっちの方が応用が利きそう。でもこの味で正解なのかな。フミノ、味見してみて」

きゅうりを細切りしたものにマヨネーズをつけて渡してくれる。ちょっと甘めで私好みだ。

「やっぱりリディナが作ると、なんでも美味しい」

「これはフミノが教えてくれたからだよ。それで、これをどうするの？」

「鰹のオイル煮の身部分と混ぜ合わせる。でも生の剥き身と混ぜても美味しい」

握り寿司、軍艦巻き、太巻き、細巻きの作り方も説明しておこう。私がある程度説明すれば、リディナが美味しいのを作ってくれるから。ああ、今から食べるのが楽しみで仕方ない……

いい感じの海岸があったから、少し早いけれど本日の移動は終わり。小さな川が海に注ぎ込んでいて、その北側が砂浜になっている。さらに外側は岩場で遊ぶのにちょうどよさそうだ。

そんなわけで夕食の調理の前に、二人で海岸を探検。探検というよりは遊びだけれども。

「こういう場所にも魚なんかはいるのかな。監視魔法で何か生きものがいることはわかるけれど、姿ははっきり見えないね」

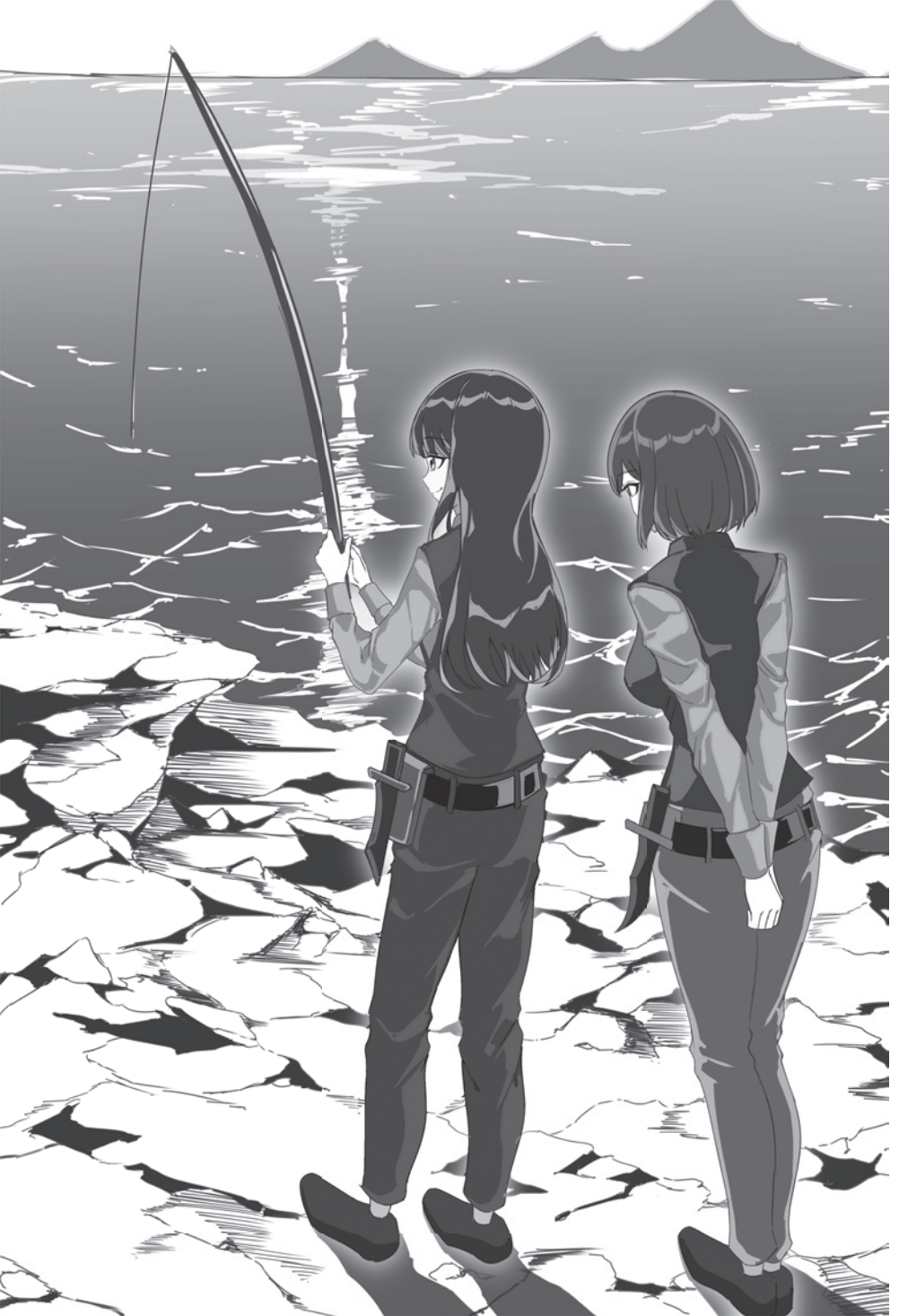
リディナの言葉でふと思いつく。

「釣りでもやる？　魚が捕れるかもしれない」

「釣りって何？」

海は知らなくても川や湖はある。だから釣りそのものは知っていると思っていたが、意外だ。

ちょうどいい、やってみよう。私もやったことはないけれど、ネットで連載していた漫画のおかげである程度は知っている。



「必要な道具を作る」
竹でもあれば、竿を作るのは簡単だろう。しかしこの国に竹は生えていないようだ。
何かいい材料はないか、アイテムボックス内を物色。どこかで家を出した際に収納した、柳系統の木の枝があった。本気で作ると時間がかかるから、魔法で乾燥させ、形を整える程度で我慢する。
針は適当な鉄で針金を作り、曲げて魔法で熱を加え、叩いてカットし、焼き入れして焼き戻しして完成。適正な大きさがわからないので、とりあえず小指サイズ。おもりも同じように製作した。
糸は服の補修用の麻糸を使用。非常に大雑把だけれど、多分これで大丈夫だろう。
というわけで竿、針、糸、おもりという安直な仕掛けが完成した。餌として、今朝購入した小さめのエビを針のサイズにちぎってつける。
「これを使って漁をするの？」
「そう。故郷ではそうやっていた」
私も実際にやったことはない。ネットで見て知っているだけで、これが初挑戦だ。
岩場を歩いて少し深そうな場所を探し、仕掛けをできるだけ遠くへ放り込む。遠くと言ってもリールなどないので、仕掛けの全長は竿の長さ程度、つまり二腕（四メートル）くらいだ。
「これで下に魚がいればエビを食べて、あの針に口を引っかけるはず。そうなると糸を引っ張る。それを感じたら引き上げる」
日本で売っていたものと比べると、全てが原始的だ。でも魚もスレていないから、多分なんとかなるだろう。そう思ったときだった。思い切り竿が引っ張られる。

「かかった」
予想以上に力が強い。そしてこっちは足場の悪い岩の上。さらに仕掛けもいいかげん。しかし失敗したら、せっかく作った仕掛けやかかった魚がもったいない。だからできるだけ糸が切れないよう、なんとか頑張って魚を泳がせつつ姿勢を維持する。
魚の泳ぐ方向と波が押し寄せてくる方向が一致した瞬間、思い切って竿を引っ張り上げた。岩の上に無事引き上げ成功。ビシバシ跳ねまくっていたので、魔法で温度を冷やして仮死状態にする。
釣れたのは私の足より少し大きい黒鯛もどき。これはお刺身だな。うまくいった。
「面白そう。私もやってみていい？」
「もちろん」
仕掛け一式、そして餌のエビをリディナに渡す。私の分の仕掛けはこれから作ろう。今度は、もう少し凝った仕掛け、リール付きのセットを。リールがないと、竿が届く範囲でしか釣ることができない。もちろん複雑な機構のものは難しいけれど、糸巻きを回すようなものなら作れるだろう。
リールができれば投げ釣りもできる。なら浮きとかエサカゴなんてのも作った方がいいかな。いずれは針をいっぱいつけたサビキ仕掛けなんかも作りたい。前に食べたとき、何かに使えるかもとっておいた魚の皮を使えば、作れるような気がする。
ああ、夢が膨らむ。しかしまずは今、私が使える基本的な竿と仕掛けから作成した方がいいだろう。一セットしかないと、リディナが使用を遠慮するかもしれないから。

†

海岸を脱出するのに、三日かかってしまった。リディナが釣りに目覚めてしまったためだ。
本日出発できたのは天気のおかげ。早朝からそこそこ激しい雨模様で、波も高い。つまり釣りには厳しい天気だったわけだ。これが晴れなら、もう少し滞在が続いたに違いない。
「この釣りって遊び、面白いよね。今まで知らなかったけれど。でもこれ、知られればきっと流行ると思う。週に一度の休息日なんて、やることなくて昼寝している人が多いんだから。やっぱり自由にならない海中の魚相手に、餌と知恵で戦いを挑むところが楽しいよね。釣った魚は美味しく食べられるし。道具を売り出せば、絶対売れると思う」
海岸へ来た初日の夕方、リディナにそう力説されてしまった。そして実際、翌日も翌々日も、朝ぎりぎり明るくなりはじめた頃から、リディナはずっと釣りをしていたのだ。
問題はエビだ。最初にエビを餌に使ったから、『餌＝エビ』と思ってしまったのだろう。放っておくと、せっかく大量に購入したエビの全てが釣り餌に使われそうだった。それではあまりに悲しすぎる。エビマヨが食べられない。だから途中から餌を、私が獲った貝や釣れた魚の切り身などに変更させてもらった。おかげで無事エビマヨも食べることができた。めでたしめでたし。
もちろんリディナだけではない。私もかなり楽しんだ。調子にのって仕掛けだの釣り道具だのいくつも作ってしまったし。原始的だけれど投げ釣りもできるリールつき竿セットとか、投げ用天秤おもりとか、コマセカゴ付き飛ばしウキとか。

リディナは釣り専業で、私は魚以外も採取している。ウニとか貝とか海藻とか。服が濡れても魔法で乾燥できる。その気になれば魔法で暖だって取れる。だから濡れるのは怖くない。なので寒くても遠慮なく海へ入っていけた。採取に必要な道具は作るまでだ。

それでも残念ながら作れなかったものもある。水中眼鏡だ。もちろん作ろうとはした。しかし砂浜の砂とその辺の草や貝殻では、透明で頑丈なガラスを作ることができなかった。もうすぐ寒くなるから、来年までには作ろう。そんな決意をする。

さらにゴーレムのバーボン君の分解整備もやった。これで仕組みはおおよそ理解できた。材料が揃えば改良もできそうだ。今度行った街で金属の材料を買っておこう。

ここにいる間、食事には困らなかった。朝食や昼食は購入したテイクアウトや移動中に作ったおにぎり、握り寿司、軍艦、太巻き、細巻きがある。

そしてリディナが、釣った魚の味をみたいというので、ある程度釣ったら調理しまくった。だから夕食も困るどころか、むしろおかずが多くて楽しいくらい。

私も採取した貝だの海藻だのを出した。怖かったけれど生牡蠣にも挑戦。新鮮だからか、アイテムボックスで殺菌殺ウィルスしたからか、当たらずに済んだ。

リディナは、牡蠣の形が気持ち悪いと言って、最初は食べなかった。しかし私が生や焼いたのをレモン汁で食べているのを見て挑戦。結果的にはかなりお口にあったようで、私が採取した二十個ちょいが全滅した。なおリディナの好みは生より焼き牡蠣だそうだ。

そんなわけで大雨の中、ゴーレム車に乗って街道を移動。こんな天気だから釣りはできないけれど、魔物討伐は可能だ。気温低めで乾燥が苦手、明るすぎも暗すぎも苦手なスライムが出まくるから。

ただスライムはゴブリンと同じ戦法では倒せない。上から木材を落としても死なないのだ。弾力があるため、落とした丸太などを跳ね返すか、スライム自身が無傷のまま飛んでいくか。だから鋭い刃物で相手をするか、魔法で直接攻撃する必要がある。

攻撃魔法があれば簡単に倒せる。スライム系は概ね、熱線魔法や冷却魔法に弱い。しかし私のレベル3程度の魔法では、狙いをつけて発動するまでの間に逃げられてしまう。

重い岩で潰す、熱した岩を落とすなど、試行錯誤した結果、私はスライム専用の槍を開発した。先端に鋭くて重い穂がついていて、後部には矢のように羽根がついている代物だ。

使い方は、この槍をスライムの上一腕（二メートル）のところに、槍の穂の部分を下にして出現させるだけ。この槍は矢じりの重さと後ろにつけた羽のおかげで、まっすぐ下へと落ちる。結果、重く鋭い槍の穂の部分が、重力でスライムにぶすっと突き刺さるという仕組みだ。

スライムの討伐褒賞金はゴブリンと比べても安い。ゴブリンは一体小銀貨三枚なのに、一般的なグリーンスライムでは一体正銅貨五枚。素材にもならないので、儲けはこれだけだ。

その代わり、出る数がとにかく多い。旧街道のように人通りが少ないくせに集落からそう遠くない道ともなると、なおさらだ。多い場所では十腕（二十メートル）に一匹くらいの割合で湧いている。

こうなると私も忙しい。ゴーレム車のゆっくりな速度でも、私の作業がてんてこまいになる。でもその分儲かる。それはそれで悪くない。小さい集落の近くを通りすぎ、数えるのも面倒なくらい

スライムを倒して収納する。そんなことをしていたら、リディナに言われてしまった。
「やっぱりフミノ、どこででも生きていけそうだよね」
いやリディナ、それは違う。
「人が多いところは無理」
「それもそうか」
そうなのだ。あと、冒険者ギルドに一緒に行ってくれる人も必要。混んでいるかとか怖そうな人がいないかとか、中の様子は偵察魔法でもわかる。ただ受付が若い女性でも初対面だとうまく話せない。何か言いたいことがあっても口に出せない。やっぱり私は、まだまだ駄目駄目だ。

第一話　事件発生

釣り、海産物採取。そんな感じで遊んだり、美味しいものを食べたりしただけではない。
一応冒険者らしく討伐もしているし、薬草などの採取もしている。スライムやゴブリン以外の魔物も狩った。リディナが買った植物図鑑で海辺に生えそうな薬草もチェックして、見つけたら収納なんてのも常にやっている。
また毎夜、ゴーレム関連の魔法について勉強をしている。本を何冊も買ったし、バーボン君という見本もいるのだ。なんとかしてゴーレムを作って、操れるようになりたい。

ただどの本にも、ゴーレムの作り方についての詳細が載っていなかった。その辺は企業秘密みたいなものなのだろうか。理論も製法に関しては、微妙にぼかした書き方になっている。
現時点で可能なのは、ゴーレムの改良くらいだ。バーボン君には今すぐ手をつけたい部分がある。足の遅さだ。力はあるけれど、やっぱり遅い。せめて今の倍、普通の荷馬車と同じくらいの速度は出せるようになってほしいのだ。
昼間は基本的にリディナと一緒に活動する時間だから、本を読んだり細かい作業をしたり、バーボン君の整備をしたりするのは夜になる。
夜ではなく朝にやった方が健康的という意見もあるだろう。日本では朝活なんてことをする人もいるらしいし。でも私には無理。自称低血圧だから朝に弱い。血圧を測ったことはないけれど。
しかもこの国の皆さんは朝が早い。六の鐘、日本の朝六時くらいには、既に動きはじめている。それより早く起きて朝活するなんて、絶対に無理。
ただ、そんなことを夜にやると、必然的に睡眠時間は少なくなる。だから余計に朝に弱くなる。
朝だけではない。昼も暇なときは、ふっと眠くなることがある。集落から離れて魔物もほとんどいなくなり、植物も見慣れたものばかりで道も単調だと特に。
ある程度意識して魔法を操らないと、バーボン君は動かなくなる。だからいつもは居眠り運転なんて事態は起こらない。人や馬車が近づいたときは魔法で気づくから、相手のいる人身事故も起こらない。
それでも……

ガタッ。ゴーレム車が急停止したショックで気づく。やってしまった。もちろん事故ではない。一瞬睡魔に襲われてゴーレム操縦魔法が途切れ、バーボン君が急停止をしてしまったのだ。
「大丈夫フミノ、疲れていない？　小休止しようか？」
「問題ない」
「この次の大きな街、パスカラでは何日か滞在しようか。フミノ、最近寝不足気味でしょ。遅くまで何かやっているみたいだし」
リディナにばれていたようだ。
「今夜はちゃんと寝るようにする」
「なんなら操縦、私がやろうか？」
一応リディナもゴーレム操縦はできる。少しだけれど練習もしてもらった。しかしゴーレム関係は完全に私の趣味だから、リディナに任せてしまうのは申し訳ない。
あと毎日ゴーレムを操縦していると、ゴーレム関係の魔法の適性が上がるかもしれない。他の魔法属性と同じように考えていいかはわからない。でも可能性はある気がする。
それに私なら、誰かが近づいてきたことが偵察魔法などでわかる。だから何かやむを得ない理由ができるまでは、私がやった方がいい。
「大丈夫。とりあえずは私がやる」
「無理はしないでね。あと眠かったら停めて休んでいいからね。急ぐ旅じゃないし」
「わかった」

麦芽飲料をコップに入れ、脱水魔法で量を半分にする。思い付きで作った眠気覚まし用のドリンクだ。カフェインは多分入っていないけれど、冷却魔法でキンキンに冷やして飲むと、苦さと冷たさである程度は眠気を追いやれる。
そうだ、エナジードリンクでも作ろうかな。でもカフェインは何から抽出できるだろう。この国にはお茶の木もカカオの木もなさそうだが、何か他に代わりになるものがあるだろうか。

天気が悪いからゴーレム車に乗りっぱなし。それでもずっと動いていると、結構進む。
空はもうすぐ夕暮れ。ピネトーという小さな村を過ぎて二時間半。旧道が新道に合流し、もう二離程度で、パスカラというこの辺で一番大きな街に出る。そんな場所だった。
いきなり私の偵察魔法が警報を発した。必死になって堪えていた眠気が一気に吹っ飛ぶ。
「リディナ、妙なのがいる。パスカラ側の半離先、右側の崖の上に中年の男二人が潜んでいる。高台だから、リディナの監視魔法でも見えるはず」
「見てみるね」
嫌な感じだ。こっちから見えないように街道を観察しているということは、ひょっとして……
「盗賊ね。ステータスにも出ている。かなりタチが悪そう」
そうか、ステータスを見ればいいのだ。今さらながら気づく。
アコチェーノ滞在中は、誰もが魔法属性があるか調べるためにステータスを見まくった。その反動で、今は逆に他人のステータスを見ないようにしているのだ。やっぱり個人情報だし。

しかしこういう場合は、せめて称号や職業だけでも見た方がいいだろう。かつて私がリディナにはじめて会ったときにそうしたように。
ゴーレム車を操縦したまま、偵察魔法で怪しい二人のステータスを確認する。間違いなく盗賊、それもタチが悪いやつだ。職業が盗賊で、称号に殺人犯とか営利誘拐犯とか極悪非道とかがある。
「どうする？」
「できれば倒した方がいいよね。あんなのがいるようだと、この辺の人全員が迷惑するし」
対人戦は気乗りしない。粗暴な連中は生理的に苦手でもある。しかしリディナの言っていることは正しい。あんなのがその辺にいたら、善良な皆様の生活に支障が出るだろう。迷惑くらいでは済まない可能性も高い。
「倒そう。どうしようか」
私は改めてリディナに尋ねた。
「ある程度ゴーレム車で行った方が、向こうも近づきやすいと思う。徒歩の人より得るものが多そうだし。このゴーレム車でも矢は防げるしね」
「火矢はさすがに無理」
「ものを奪うことを考えているなら、火矢は使わないと思うよ。使っても私の水属性魔法でなんとかできるし。ただ盗賊の捕縛はフミノ頼りになっちゃうけれどいい？　いざというときは私も風属性を使うけれど、あれを使うと生きたままの捕縛は無理だから」
風の刃だけではない。リディナはつい最近、風属性がレベル5になって、新しい攻撃魔法も使えるようになった。風裂斬と言って、風の力で対象をみじん切りにする魔法だ。どっちを使っても盗賊の命はない。盗賊相手なら、殺しても悪い称号や職業にはならないけれど。
「首から下を埋めるとかの措置でいい？」
「それが一番いいと思う。そうやって捕まえておいて、明日の朝一番で街へ行って訴えれば」
「今回の襲撃は十二人。別に見張りが二人」
私はゴーレム車を今まで通り走らせながら偵察魔法を使って、リディナに気づいたことを報告する。
「そこそこ大きな集団ね。魔法使いはいる？」
ざっとステータスを確認。
「使える魔法を持っている人はいない。ただ弓使いが二人。無力化するまで外に出るのは危険」
「フミノに任せて大丈夫？」
「問題ない」
出てきた時点で全員埋めるだけだ。土の在庫は山ほどある。とにかく一度埋めて、後で呼吸ができる程度に空気穴を通してやればいい。ただガチガチに固めると、呼吸ができないかもしれない。身動きができなくなる程度に、ふんわり埋めることを心がけておこう。
私たちでとどめを刺す必要はない。どう措置するかは衛士たちに任せておけばいいのだから。
「なんならあえて一人くらい逃がした方がいいかもね。ここに出てきているのが盗賊団全員とは限らないから。逃げ帰るところをフミノの偵察魔法で追ってもらえば、本拠地がわかるよね」

確かにそうだ。なら、ちょうどいいのが二人いる。
「逃がすのは見張り二人。離れているから気づかなかったことにする」
「確かにそれでいいよね。ところでフミノの偵察魔法、今はどれくらいまで後を追える？」
「今なら二離程度」
「なんかどんどん距離が伸びていない？」
その通りだ。起きている間だけでなく、寝ている間まで偵察魔法は発動させっぱなしだから。空属性のレベルは上がっているし、偵察魔法の熟練度も上がっているし、使える魔法そのものも増えている。
ただしいまだに攻撃魔法は使えない。悲しい。空属性には、空即斬という攻撃魔法があるのだけれど、なぜか私には使えないのだ。レベルは足りているはずなのに。でもまあ、それはそれとして。
「なら、よほどのことがない限り大丈夫だよね。それにフミノは速く移動する魔法も使えるし」
その通りだ。縮地で追いかければ、相手が馬だろうと問題ない。私は頷く。
「じゃあ、後は敵が近づいてくるのを待つだけね」
「なんならバーボン、もっとゆっくり歩かせる？」
この提案は、盗賊たちが狙いやすいようにと考えてのことだ。しかしリディナは首を横に振る。
「今のままで十分だと思うよ。歩きより遅いくらいだし」
確かに。ああ早くバーボン君を改良したい。案は既にできている。ただ改良に必要なまとまった時間がとれていないのだ。

そんな話をしている間にも、盗賊団は動いている。まずは見張りから一人が動いて、この道の先にいる集団の方へ。
「この先の切通しで襲撃してくるようね」
リディナの監視魔法でも見えたのだろう。私は頷く。
「おそらく」
リディナが言った切通しはこの先三百腕のところだ。やや高い枝尾根を高さ一腕半、長さ二十腕程度削って、道を通している。そして盗賊団のメインは、右側の切通しの上で待機中。おそらく私たちが切通しの真ん中まで行ったら、降りてきて襲撃するつもりなのだろう。
この地形なら、ちょうどいい。土を上から被せるだけでも、逃げ場なく埋まる。上に残った連中は、穴を作って埋めるいつもの方法を使えばいいだろう。
終わったらバーボン君とゴーレム車を収納。私とリディナは土魔法で足場を作って脱出。残した見張りを追って本拠地を襲撃。全部終わったら街へ行って、衛視庁と審判庁に報告して一件落着。
よし、これでイメージは掴めた。あとはこの通り、盗賊が襲ってくればＯＫだ。私はバーボン君を操縦しながら、いつでもアイテムボックスを使えるように心の準備をする。
この距離まで来れば、盗賊一人ひとりのステータスを見るのも容易い。念のため、犯罪者以外が紛れていないか確認。うん、どいつもこいつも酷い称号がついている。
もちろん彼らが今のようになったのは、彼らのせいだけではないだろう。生育環境などの影響があるのも間違いない。しかしここで許したくないくらいには、罪を重ねている。

私は正義の味方ではない。他人を断罪できるほど偉くもなければ、優れてもいない。
だからこれからの行動も、正義のためではない。そうしたいと思う私のためだ。傲慢だと言われようが構わない。人間なんてそんなもの。話せばわかりあえるなんて、信じないし信じられない。
それでもここで止めなければ、彼らはさらに迷惑を振りまくだろう。すべてがうまく行く解決法などない。
ただリディナとは、わかりあえると幻想を持っていたい。そうは思うけれども。
ゴーレム車は、ゆっくり切通しにさしかかる。やや遠くにいる見張り二人以外は、切通しの手前側二カ所に集まった。前後に分かれて、ゴーレム車の進路を塞ぐようだ。二人が弓を番え、こっちに向ける。あれが射られたら、向こうが攻撃を開始したと捉えていいだろう。射られた瞬間に矢を収納できるよう、意識する。
操縦しながら態勢をとるのがそろそろ辛くなってきた。バーボン君を停める。
敵が右側、切通しの上からこっちを見下ろしている。一人が右手を上げ、そして振り下ろした。見張り役以外が一斉に動き出す。射手二人の矢が放たれた。私はそれと同時にその矢を収納し、さらに射手二人の足下の土も収納する。
「うごっ！」
いきなり足場を失った射手が、斜面を滑り落ちる。敵数人が、はっとした表情で射手の方を見た。しかし遅い。みんな飛び降りるなり滑り降りるなり、アクションを起こしてしまった後だ。
最初の数人が着地した瞬間を狙って、土を上から大量放出。見張り役以外の全員が埋まった。一名が顔まで土に埋まったので、呼吸できる程度に土を除く。
余分な土を街道上から排除し、残した土を通行の邪魔にならないよう、突き固め魔法で固める。これで道幅二腕（四メートル）のうち、一腕（二メートル）強が通れるようになった。盗賊を回収するまでの間も、人や馬車が通行可能だ。もちろん私たちのゴーレム車も、収納せずそのまま通れる。
盗賊どもはなんやかんや、文句を言ったり凄んだりしているようだ。私たちはゴーレム車の中にいて見えないはずだけれども。やつらの言い分を聞く気はない。聞く義理もない。私たちを襲ってきた、ステータスに盗賊とついている連中。判断材料はそれだけで充分だ。
私はアイテムボックスから適当な大きさの板と筆、インクを出した。
「リディナ、看板を頼む。人が通ったとき、こいつらを助け出さないように。私は見張り役の追跡を続ける」
「わかった」
見張り役二人は、仲間が埋まったのを見た後、少し迷った様子を見せた。どうするかな、助けに来るかな。そう思ったのだが、あっさり諦めた。私たちとは反対方向の獣道を駆け出す。
よしよし、なら予定通り盗賊団の本拠地まで案内してもらおう。私は偵察魔法で後を追う。
やつらは獣道を迷わず走っていく。この道に慣れているようだ。よく見ると踏み固めたり枝を切ったり、ある程度整備した痕跡もある。やつらが襲撃に使うために、整備しているのだろう。ならば、この辺に根を張ってかなり悪さをしている可能性が高い。
半離（二キロメートル）くらい走った後、二人は道に出た。いや廃道というべきだろうか。焼土舗装はところどこ

ろひび割れ、上を草が覆っている。一昨年の津波で使われなくなった道に違いない。彼らは廃道を右へ。この調子では少しばかり遠くまで行きそうだ。私の偵察魔法の範囲外に出る可能性もある。

「思ったより遠い。追いかける。ここは任せていい？」

「大丈夫。気をつけてね、フミノ」

私はゴーレム車を出る。早速盗賊たちが私を見つけて、なんとかしようと脅してきた。動けない状態とわかっていても怖い。だからさっさと縮地でこの場から移動する。

数秒で先行した二人との距離が縮まる。あまり近づきすぎて気づかれるとまずい。彼らから三百腕離れた街道上で停止。ゆっくり歩きながら、偵察魔法で様子をうかがう。

二人が走っている廃道は、この先三百腕でこの街道と交差する。廃道はその後、海側に出て小さな村らしき場所へ。

しかし村の雰囲気がおかしい。なんだろうと思って視点を近づけて理解した。廃村だ。家々の半分が崩壊し、残り半分も朽ちかけで、畑や道だったらしい場所も雑草が蔓延っている。

おそらくこの村は、一昨年の津波で廃村となったのだろう。ここに盗賊団のアジトがあるのか。偵察魔法の視点を元に戻し、盗賊二人を追う。

二人は予想通り廃村へと入った。そして奥、海側にほど近い高台にある、大きな屋敷へ向かう。この屋敷だけは、完全に原形が残っている。高台にあるため、津波の被害を免れたのだろう。明らかに今も使われている気配がある。

ここがおそらく盗賊団の本拠だ。それにしても、元はなんの屋敷だったのだろうか。この程度の

村の領主にしては、規模が大きく豪華すぎる。なら、大商人か子爵以上の貴族の別邸だったとか。

屋敷を囲む塀はそこそこ高く、門も頑丈そう。そして入口の門には二人ほど門番がいる。門の裏に隠れて正面から見えないようにしているあたりが、いかにも怪しい。

私が追っていた二人は、門番と二言三言話すと、そのまま屋敷の中へ。

屋敷の周りをさっと確認する。外で警戒しているのは、門番の二人だけだ。ステータスを確認する。二人とも盗賊。称号に殺人犯、誘拐犯、窃盗犯、暴行犯など、まともではない単語が並んでいる。

次は中の確認だ。二人を追って視点を屋敷内へ。入ってすぐの場所は広い玄関ホール。やはり元は大金持ちか貴族の別邸だ。造りからそう感じる。

二人は階段をのぼって二階へ行った。分厚い扉をノック。音は聞こえないけれど、おそらく入れとでも言われたのだろう。扉を開けて中に入る。

太めで脂ギッシュな中年の男が、豪華そうな椅子に座っていた。ステータスを確認すると、こいつが盗賊団のボスで、しかも魔法使いとある。火属性がレベル6で、大熱波や爆発などの攻撃魔法も持っている。正面から戦ったら、今の私やリディナでは勝ち目がない。

さらにボスのステータスを見ていくと、元エルドヴァ侯爵家三男（廃嫡）なんてついている。素行不良で実家から捨てられたのだろう。さらにプラスして、ペドフィリアでサディストとも出た。最低だ。

おっと、報告をしていた見張り二人の頭が、突如燃え上がった。魔法だ。どうやら逃げてきたという報告が、ボスのお気に召さなかったらしい。死んだか。一瞬そう思ったが、燃え上がったのは

一瞬だけ。被害があったのも髪の毛のみ。二人とも生きている。単なる脅しのようだ。
敗北を正しく報告した見張りを脅しても仕方ない。少なくとも私はそう思う。きっとこのボスは、そういった理性的な判断ができない輩なのだろう。
見張り二人はペコペコ頭を下げ、逃げるように部屋を出た。
さて、他に盗賊はどれくらいいるだろう。少し視点を引き、屋敷全体を視界に入れる。ボスと見張り二人、門番二人を含めて、反応は十四人。一人、少し違う反応があった。なんというか弱々しいのだ。気になったので視点を動かす。場所は地下だな。視点を近づける。
うっ、これは。思わず目を瞑ってしまった。しかし偵察魔法では意味はない。ここではない世界――当時の私自身の恐怖が蘇る。震えがとまらない。
明かりとりの窓が天井近くにあるだけの、石造りの部屋だ。他にあるのはベッドと鎖の固定具。用途を考えたくないような金棒や鞭、それもトゲが大量についたやつ。
鉄製の素っ気ないベッドの上に、半裸状態の女の子が一人、倒れるように横になっている。服は破れて身体にひっかかっている状態。はだけた部分から瘡蓋が見える。擦り傷の数倍酷いやつだ。
服の汚れはよく見ると乾いた血だった。そして女の子の表情。眠ってはいない。うつろな目は開いているが何も見ていない感じ。無表情。
何が行われたのか、私は想像してしまった。立っていられない。しゃがみ込んでしまう。吐き気がする。動悸も酷い。身体がふらつく。視界が色を失う。ブラックアウトしかける。そのくせ、あの男が近くにいるような錯覚に襲われる。違う、なんで……

落ち着け私。襲われているのは私じゃない。襲われたのは今じゃない。私はあのときの私じゃない。
落ち着け私。せめて動いてスキルを使えるくらいには。そうしないとあの子を助けられない。だからまずは呼吸だけに集中。意識的にゆっくり吐いて、吸って、吐いて、吸って……
大丈夫。今の私は大丈夫。あの屋敷は、私のアイテムボックススキルの圏内。だから大丈夫。
駆けつけたい、すぐに何かしたいという気持ちをこらえ、私は屋敷内の他の気配を確認する。他に犠牲者はいないか、そして倒していいやつばかりかどうかを。
意識的にゆっくり呼吸しながら、他の連中のステータスを確認する。他は盗賊だ。それも昨日今日なったばかりというやつじゃない。逝ってよし。もちろん殺しまではしないけれど。
よし、あの子の救出に向かおう。
一瞬だけ、リディナのところへ報告に戻るという考えが浮かんだ。本当ならそれが正しい。でも無理だ。あの子をあのままにしておけない。私にはできない。
どう倒そうか。考えても選択肢はそれほどない。私は攻撃魔法を持たないし武器もない。攻撃に使えるのは、アイテムボックスのスキルだけ。土を出して埋めるか、穴を作って埋めるか。
なら念のため、土を補充しておこう。ちょうど歩いている途中に崖が見えた。木の生えていない部分を狙って、崖を削らせていただく。土中の生物分の魔力が減ったけれど、大したことはない。
足が走りたくてうずうずしている。早くやつらを倒してあの子を救いたいと思っている。嫌なのだ。自分だろうと他人だろうと襲われるのは、暴行されるのは。信条ではなく生理的に。
しかもあの子、怪我をしている。今の状態程度なら私の魔法でなんとかなる。でも、きっと被害

はそれだけではない。だからこそ早く救わないと。
焦るな私。失敗するわけにはいかない。準備は大丈夫か。方法は問題ないか。武器である土の補充は充分だ。敵はボス以外、基本的に土を出して動けなくするだけ。
ボスだけは魔法が使えないよう、閉じ込める必要がある。土で部屋を囲んで閉じ込める程度では駄目だ。レベルの高い火属性魔法は、土ですら融解させてしまう。
穴だ。深い穴に落とせばいい。やつが使える魔法をもう一度確認する。属性そのものは各属性1以上の適性があるが、使える魔法は火属性のみ。なら穴に落としてしまえば、脱出はできないだろう。熱で横穴を掘るなんてやったら、高温で自分が御陀仏だ。
やつは空属性の魔法を持っていない。見えない場所から仕留めれば抵抗できない。問題ない。
方針が決まった。私はアイテムボックススキルを発動させ、まずは門番二人を首まで埋める。
次は建物の壁の一部を収納した。これは、内部まで魔法やスキルが通るようにするためだ。さらに中にいる盗賊どもを、手あたり次第に埋めて動けなくする。呼吸以外できないように。
四人埋めたところで、人の動きが変わった。気づかれたようだ。かまわない。私のスキルを防ぐ方法などない。私は、彼らを逃がさないように注意しながら、土を出していけばいい。
これは戦闘ではない。作業だ。興奮しているのか冷静なのか、自分でもわからない。しかし着実に盗賊は行動不能になっていく。
ついにボスが部屋を出て走りはじめた。逃げだそうとでもしているのだろうか。とりあえず土を大量に出して足止めしておこう。やつが動けない間に、残りの盗賊を行動不能にする。

爆発が起きた。ボスの魔法だ。爆発で自分の周囲の土をどけた。さすがレベル6の魔法使い。しかしそれくらいは予想の範囲内だ。さあ逃げろ。そう思いつつ、私はやつの動きを偵察魔法で注視する。
やつは玄関が部下を封じた土で通れないのを確認すると、ホールの壁を熱魔法で壊して穴をあけ、外へ出る。手入れされていない庭に出て、村の方へと走る。足は遅い。太すぎる体形に見合った速度だ。
よし、やつの下周辺二腕（四メートル）の土を、深さも二腕（四メートル）収納。底まで落ちたのを確認して、さらに一腕（二メートル）ほど収納。これで深さ三腕（六メートル）の穴だ。そう簡単に逃げられまい。そう思ったとき、予想外の事態が発生した。
穴の途中から水が出はじめた。まずい。これでは水を使って脱出される恐れがある。対策を考えつつも、縮地で近くへ移動する。
案ずるまでもなかった。やつが自分の魔法で土を焼いて水を止めた。どうやら、水が出るのがお気に召さなかったようだ。ひょっとしてカナヅチなのだろうか。浮きやすそうな体形なのに。
いずれにせよ、これでOKかな。しかし穴の端が爆発した。縁が削れる。爆発で穴を広げて脱出するつもりのようだ。すぐに思いつく対策は、もっと穴を深くすること。ボスの下の土をさらに収納する。より深く、周囲を削っても、脱出前に生き埋めになるくらいまで。
二腕（四メートル）ずつ三回、計六腕（十二メートル）ほど下まで落とした。爆発がやむ。脱出不能と悟ったのだろう。その代わり穴の周囲、土が落ちない範囲で爆発が発生した。見えないからと、とにかく周囲を攻撃しているようだ。周囲の樹木、塀、そして家の一部までが爆発で壊れて崩れる。
大丈夫。私は爆発や魔法は怖くない。人よりは怖くない。しかしこれでは煩いし移動の邪魔だ。

ここは静かにしてもらおう。
私の場合、途中が密閉されていると、その先へ魔法を行使できない。おそらくやつも同じだろう。だからやつの上に蓋をしてしまえばいい。
もったいないけれど、アコチェーノで仕入れた間伐材の丸太を二十本並べて穴の上に出し、即座にその上に土を大量に出す。木材と土で蓋をした形だ。無理に壊すと生き埋めになる。これでどうだ。
静かになった。私の意図を察したようだ。
それでは行こう。彼女を助けに。元門番が埋まった土の塊の横を通り、塀の中へ。さらに、収納して壁がなくなった部分を通って屋敷の中へ。地下への階段を下りる。
さてどうしよう。彼女も知らない人に近づかれると怖いだろう。盗賊でないともわからないだろうし。『人＝怖い』という状態になっている可能性もある。
考えてもいい案が思い浮かばない。正攻法で行こう。私は階段を下りたところで呼びかける。
「私は通りすがりの冒険者。盗賊は全員行動不能にした。これからそちらへ行くけれど、怖がらないで。危害を与えるつもりはない」
返答はない。でも聞こえている。視線が少しだけ動いた。表情は無表情のままだけれど。
あえて足音をさせて歩く。扉を開けようとするが開かない。鍵がしまっている。
「鍵を壊して入る。心配しないで。助けに来ただけ」
そう宣言してから、熱魔法で鍵を壊して扉を開く。
彼女は無表情のまま、視線だけをこっちに向けた。直接目で見ると思ったより小さくて幼い。十歳前後か、もうちょっとだけ上か。
「お姉さんは？」
急に聞かれた。思わず後ずさりしそうになる。耐えろ私、怖がるべきなのは私ではなく、彼女の方だ。そう自分に言い聞かせる。
「通りすがりの冒険者。途中でこの盗賊団に襲われた。だから返り討ちにした。盗賊は全員動けなくした。安心して」
大丈夫、怖くない。私も彼女も。自分に言い聞かせながら、ゆっくり近づく。
彼女は私を怖がらない。私が女子だからだろうか。とりあえずは、拘束を外そう。
「鎖を壊す。少しだけ熱を感じるかもしれない。動かないで」
足枷の鍵部分だけ一気に高熱をかけて外す。大丈夫、熱くはなかったはず。外すために足枷を手で持っている私も大丈夫だったから。
「傷を治療する。少し待って」
どの傷も深くはない。死なない程度に虐めるという目的で傷つけたからだろう。吐き気がする。
でも大丈夫、この程度なら私の水属性レベル2の治療魔法で、完全治癒可能だ。傷が全て消えるようにイメージして、念入りに治療魔法をかける。よし、傷は全部消えた。
あとは服。手持ちは私の服しかない。でもサイズ調整ができる服だから大丈夫だろう。
「大丈夫？　身体は動く？」
女の子は右手を動かし、傷のなくなった皮膚を不思議そうな目で眺めた。

「お姉さんは魔法使いなんですか」
妙に冷静だ。表情も声色もそう感じる。
「一応」
「なら貴族様なんですか」
「違う」
「でも貴族様でないと魔法は使えない。そう聞きました」
おそらくあのボスがそう言って、威張っていたのだろう。
「それは古い知識。誰にでも適性はあるし、勉強すれば魔法を使える。冒険者ギルドが発表した」
「そうなんですか」
おかしい。冷静すぎる。しかし今はその方がありがたい。だから話を進めよう。
「あの男や盗賊は、どうなりましたか」
「部下は土に埋めて呼吸だけできるようにした。ボスは穴に閉じ込めている」
「お姉さん、強いんですね」
「強くはない。ある程度魔法を使えるだけ」
厳密には魔法ではなくスキルなのだけれども、そこは割愛。説明が面倒だし、この子にどこまで話していいかわからないから。
「とりあえず着替えて。サイズがあわないかもしれないけれど」
「ありがとうございます」

違和感はある。しかしとりあえず着替えさせて、それからリディナのところへ戻らないと。
またリディナに怒られるかなと思う。この子を連れて帰ることではない。独断で動いて報告しないまま、かなり時間がかかってしまったことに。仕方ない。私としては見過ごせなかったのだ。
そういえばこの子の名前を聞いていなかった。今さらながら気づく。ステータスを見たから、名前はわかっている。でも初対面だから、聞いておく方が正しいだろう。
とりあえず私から名乗ろう。必死に文例を考えて、忘れないうちに口に出す。
「私はフミノ。ここから遠い東の国の出身で、今は二人パーティで冒険者をしている」
こんな感じでいいのだろうか。自信ない。私から能動的に話すなんてことは滅多にないから。その辺リディナに頼りきりだなと少し反省。反省しても対人恐怖症は治らないのだけれども。
「私はセレスと言います。ところでここには、盗賊と私以外に捕えられている人はいなかったでしょうか？」
この質問にはどう答えればいいだろう。ちょっと考える。もし彼女と一緒に捕らえられた人がいたとしたら、『今は他にいない＝全滅した』になってしまう。
しかし嘘を言ってもすぐばれる。こういうときリディナなら、どう返答するだろうか。わからない。でもあまり時間をかけるのも変だ。
「私が来た時点では他にいなかった。逃げたかはわからない」
「そうですか。ありがとうございます」
うん、やっぱり冷静だ。そう思ってふと気づいた。セレスは冷静なんじゃないと。

冷静とは感情をコントロールできている状態であって、感情が感じられないことじゃない。きっと感情が死んでいるのだ。酷い目に遭いすぎて。

セレスに何があったのか、私は正確には知らない。状況から想像するだけだ。それでも寒気を感じる。足が震えそうになる。落ち着け私。震えてもなんにもならない。今やることはセレスを連れて、リディナのもとへ戻ることだ。それだけを考えよう。

「着替え終わりました」

その言葉で私は我に返る。

「それじゃここを出る」

「街へ戻るんですか」

「もう夜だから街門は閉まっている。今夜は野宿して明日街へ入る」

「野宿ですか」

「大丈夫。野宿と言っても危険ではない」

「わかりました」

やっぱり感情が感じられない。野宿かと聞いたのも、単に確認という雰囲気だ。

地下から階段を上る。あちこちに土の山ができているのが見える。ついでにうるさいしゃべり声も聞こえる。ああいう声は生理的に嫌いだ。しかもこっちを見つけて話しかけてくる。脅したり、取り入ろうとしたり。ああ嫌だ。さっさとここを出て、リディナのところへ帰ろう。

「セレス、急ぐからちょっと失礼」

問答無用でセレスを抱きかかえる。縮地で移動だ。あっという間に屋敷から出て、村からも出る。そのまま一気に廃道を通って街道に出て、リディナのところへ。

リディナはゴーレム車の外で待っていた。私たちの姿を見て、ため息をつく。

「何が起きたかは大体わかるしね。仕方ないかな」

「ごめん」

「お腹空いたでしょう、とりあえずはご飯にしましょう。あと私はリディナ、フミノと一緒に冒険者をしているの。あなたは？」

さすがリディナだ。ごく自然に名前を名乗れるし、相手にも聞ける。こういう技能は私にはない。

「セレスです」

「それじゃセレス、よろしくね。あとフミノ、三人だから家を出そう。二番目に手に入れた方で。もうこの時間だから、この道を通る人もいないでしょ」

二番目に手に入れたというと、一階建ての小さい家か。あれなら市販で最大サイズの自在袋に入ると強弁できる。静かになったとはいえ盗賊もいる。セレスもまだ、どんな子かはわからない。ここで手の内は見せない方がいいというわけだろう。納得だ。

「わかった」

私はゴーレム車の隣に、一階建ての小さなお家を出す。

「ゴーレム馬車の中に、二人分の寝具を出しておいて。私はこっちで夕食の準備をするから」

つまりセレスには家の方で寝てもらい、私とリディナはゴーレム車の方でというわけか。今後の

ことも話さなければならないし、了解だ。
「わかった」
「それじゃセレスはこっちに来て」
夕食のストックは、リディナの自在袋にもある程度入っている。だから私はこのままゴーレム車の中を寝台仕様にして、寝具を出す作業をすればいい。
テーブル板を上に引っこ抜いて縦にして、テーブルの足だった部分にはめ込むように装着する。これが両ベッドを隔てる壁代わり。椅子部分の背もたれのロックを外して倒し、できた台にマットと布団を載せる。この辺はネットで見た、寝台特急の座席からベッドへの変換方法を参考にした。
よし完成。それではリディナたちと合流しよう。私はゴーレム車を出て小さいお家へ移動する。

本日の夕食は肉煮込み。定番だなと思ったら少し違う。
「鹿肉が減ってきたから、今日のは羚羊肉。調理法も変えてみたよ。煮込みじゃなくて焼き煮って言うんだけれどね。味付けもかなり濃いめ。セレスの口にあわないようなら言って。他のメニューのストックもあるから」
確かに汁が少なめで色も濃い。こんな料理は過去に作っていないはず。ということはだ。
「私が出た後、料理したの？」
「帰ってくるのが遅くなりそうだと思ったから」
「ゴブリンを倒したり、盗賊を見張ったりしながら？」

「最初に来たゴブリン二匹を倒したとき、言っておいたの。『うるさいと魔物が寄ってきやすいよ。あと私の攻撃魔法は、もう一人と違ってこれしかないから、大人しくして』って。そうしたら後は静かなものよ」
完全に脅しだ。ゴブリンをすっぱりやった後にこんなことを言われたら、確かに黙るしかない。
リディナ、逞しくなったな。
「それより早く食べよ。フミノの感想も聞きたいし」
そんなわけで早速いただく。あれ、甘い。そして肉がやっぱり違う。牛肉っぽい？
「牛の肉っぽい」
「うん、羚羊は牛に似た味なんだよ。食べ比べると、少しだけ味が濃い感じかな。だから味付けは濃いめがいいの」
それで今までと違って、濃いめの甘辛味というわけか。あと、これと何か似た味を知っているような感じがする。気のせいだろうか。そうだ、すき焼きだ。調味料はかなり違う。醤油ではなく魚醤で、砂糖ではなく水飴、なおかつ香草類も入っている。しかし全体としては、間違いなくすき焼きの味だ。
見かけはすき焼きではない。一人分ずつ皿に盛ってあるし、豆腐も白滝もない。しかし舌が、これはすき焼きだと訴える。
ならばこうしてやろう。私は適当な深皿を七枚、平皿を一枚出す。深皿の一つに卵を六個入れ、平皿にご飯を軽く盛る。このご飯は共用分で、自分用は小さめの深皿一つに軽く盛って、と。

出した生卵は『生みたてすぐに自在袋に入れたので生でもＯＫ』という触れ込みのもの。なお鶏ではなく、アヒル系の鳥の卵だ。この国ではこちらが一般的だから。大量に買ってあるので、これくらい使う分には問題ない。

「フミノ、それどうするの？」

「こうする」

深皿を一枚とり、そこに卵を割ってかき混ぜる。煮込みの味がたっぷり染みた肉をとって、生卵につけ、ご飯と一緒にいただく。美味しい。高級なすき焼きの味がする。食べたことはないけれど。

「それってフミノの国の食べ方なの？」

「よく似た料理がある。それ専用の食べ方」

まさかこんなところで本格的すき焼き……ではないけれど、似たようなものを食べるとは思わなかった。美味しい。食が進む。

「セレスも遠慮しないでどうぞ。フミノの食べ方は真似してもしなくてもいいからね。あと口にあわなかったら言ってね」

「私も食べていいんですか？」

「もちろん。お金もかかっていないしね。お肉はフミノや私が狩ったときに傷つけちゃって、高く売れないものを使っているから。遠慮しないでどうぞ」

リディナの風の刃を使うと、獲物を両断してしまう。そうなると売値が落ちてしまうので、自家消費となるわけだ。だから鹿や羚羊、オークなどの肉や皮に価値がある魔獣や魔物を討伐するとき

は、できるだけ私の土埋め作戦で仕留める。それでも狙えない場合もある。

結果として自家消費用のストックがたまる。おかげでこうやって食事が豊かになるわけだ。

「ありがとうございます」

セレスはそう言ってから、まずはパンをそのまま口にする。

「美味しいです。柔らかいし風味もよくて」

「ありがとう。それ、私が焼いたんだ。買うより安くできるし、材料も好みのを選べるしね。あとはおかずもどうぞ。ラルドも自由に使って」

「でも申し訳ないです。服も借りてしまっていますし、返せる当てもないですから」

「フミノは五着は同じ服を持っているはずだし。とりあえず今日は食べて、ぐっすり寝て」

「ありがとうございます」

よしよし、セレスもおかずを食べはじめた。

「この焼き煮という料理も美味しいです。初めて食べました」

「ここより北の中央山地の方、パスタライ地方の料理なんだ。あの辺は羚羊が結構出るから。羚羊が獲れたら、大きくて平たい鉄鍋でこの焼き煮を作るの。最初に脂を入れて焼いた後、香草と酒とお肉を入れて焼いて、タレを入れて、最後に野菜を入れて煮えたら完成」

「よく食べられるんですか」

「この前までは鹿肉を使っていたから、作っていなかったな。これは羚羊のお肉で作るものだから。あと丁寧に話さなくていいよ、普段の話し方で」

「わかりました」
うーむ、これが地なのだろうか。それに、やっぱり声や表情に感情が感じられない。
また、セレスの今後という心配もある。家族や頼れる親戚とかがいるかどうか。ステータス表示での年齢は十一歳。この齢では、孤児院などの保護施設に入るのは無理だろう。かといって、ちょうどいい仕事がすぐに見つかるとは限らない。
今のところは、リディナはセレスに細かいことを聞かない方針のようだ。なら、とりあえずリディナに任せよう。対人技能は私とリディナとでは天と地ほどの差があるから。
「うーん、やっぱり卵を生で食べるのって抵抗あるよね。試すかどうか迷うな」
リディナが私の食べ方を見て、そんなことを言う。それならば次の提案だ。
「こういう料理法もある」
もう一つ皿を出す。焼き煮のおかずを皿に並べるように載せて汁をかけ、上に溶き卵を回しかける。焼き煮の方から熱を通して、沸騰したら卵の表面だけさっと熱をかけて軽く固める。深皿にごはんを軽く盛り、この上に今作った卵とじを汁ごとかければ完成だ。
すき焼きの卵とじ丼、いや開化丼というべきだろうか。その辺の厳密な定義を私は知らない。ここは日本ではないから関係ないけれど。念のため試食。うん間違いない味だ。
「食べてみて。こんな感じ」
皿ごとリディナに渡す。リディナは受け取って、まずは卵部分から口に運んだ。次にご飯と一緒に。さらにはお肉やおかずの入った部分とご飯を一緒に。

「あ、これ美味しいかも。これもフミノの国の食べ方？」
「そう」
「ならやってみるね」
それならばということで深皿を追加で四皿出す。早速リディナが調理を開始。やはり私よりリディナの方が、手つきも魔法も上手だ。この辺は料理技能の差なのだろう。
リディナは作った卵とじ丼をセレスに渡した。
「試しに食べてみて。お米の料理はあまり一般的じゃないから、口にあわないかもしれない。駄目なら私が食べるし、好きならもう一個私の分を作るから。ただ無理して食べないでね。好みもあるし」
「ありがとうございます」
セレスは最初の一口をゆっくり口に運び、そしてさらに二口食べて頷く。
「美味しいです。クスクスとはまた少し違った味と食感なんですね。上のおかずとよく合います」
「味をつけないまま米をふっくらさせるのが、フミノの国のやり方なんだって。私もわりと好きだから、うちの夕食はこのお米を出すことも多いんだよ」
リディナはセレスがさらに食べるのを見て、自分用の卵とじ丼を作りはじめた。
それにしても物凄く久しぶりだ、甘い料理を食べるのは。フルーツ系とかおやつ系なら確かに甘い味のものもあった。しかしおかず系の料理ではおそらくこの世界に来て初めて。
これは何かに応用ができそうな気がする。丼系だけではない。他にも何か甘味を使えそうな気が。今すぐには思いつかない。しかし何かあったような気がする……

夕食後、リディナと私は、寝室仕様にしたゴーレム車へ移動する。
セレスには、家の下段ベッドを使うように言っておいた。本棚についても説明したところ、植物図鑑を見ながら寝るそうだ。ただセレスは文字が読めないらしい。だから絵だけ見ることになる。
彼女は灯火魔法も使えない。だからバーボン君を家に入れている。そうすれば、私がバーボン君を通して魔法を使えるから。寒い、暑い、照明を消す、照明をつけるなど、セレスの要望については、バーボン君経由で私が聞いて魔法を発動させる形だ。
さて、ゴーレム車内で横になってリディナと会議。なおリディナは秘話魔法を発動させている。
「リディナ、セレスをどう思う？」
私はセレスの感情のなさについて、聞いたつもりだった。
「今はまだわからないけれどね。悪い子じゃないとは思う。ただ文字や数字、簡単な計算は教えないとね」
これは明らかに、私の質問の意図と別の回答だ。どうにでも取れる私の質問の仕方が悪い。
もう少し考えた上で、次の質問をする。
「表情や声から感情が感じられない。大丈夫だと思う？」
「今は心配しなくていいと思うよ」
リディナからはそんなあっさりとした返答。
「どうして」

「人って環境が酷すぎて、そのままだと耐えられないときはね、考えたり感じたりする心の一部を凍らせてしまうことがあるの。全部感じたら耐えられないから。これは自分だという感覚さえ凍らせもする。自分でなければ痛くないし苦しくない。あの子も酷い目に遭ったんだろうと思う。フミノの服を着ているということはきっと、フミノがそうせざるを得ない状態だったんだろうしね」
さすがリディナだ。状況をほぼ把握している。そして心を凍らせるという意味も、私は理解できる。ここではない世界で、そうする必要があった時代を過ごしたから。
「でもそれだからこそ、私たちは心配しなくていいし、心配しても仕方ない。セレスの凍った心や実感が戻るのを待つしかない。せめて前よりはましな環境と生活でね。ゆっくりと気長に」
確かに言う通りだなと納得する。
「実際、フミノも私と会った頃は酷かったよ。あの子と状態は少し違うけれどね。フミノの場合は人に対する恐怖以外には特に何もない、生きていければいいという感じで。それでもきっとフミノとしては、あれである程度回復した状態だったんだろうと思う」
言われてみれば確かに。あの頃は生きていければいいとだけ思っていた。あと他人がとにかく怖かった。あの頃に比べれば、かなりましになっているんだな、私も。
「私もまた違うけれど、きっと酷かったんだろうと思う。ただフミノが私を助けてくれた。だから今の状態まで戻れた。実のところあの頃、フミノと出会う寸前までは、絶望と怒りだけで生きている感じだったしね。けれど怒りの対象の半分があのとき死んじゃって。そしてフミノにはどうやっても怒りようがなくて、むしろ人がよすぎて危なっかしく見えて。おかげで自分がなんとかしなきゃ

と思えて。時々自分の今までを思い出して、死にたくなったときもあったかな。でも私がいないとフミノが大変。そう思えばそうするわけにもいかなくて。そんなこんなで気づけば、今はこんな感じ。日々楽しんでいる状態になれたわけ」

リディナがそんな状態だったなんて、私は気づいていなかった。自分のことだけで、いっぱいいっぱいだったから。今までの間、ずっと。

「だから今のセレスについても、心配しなくていいと思う。でも一応、偵察魔法で注意しておいた方がいいかな。自分に対しての実感が戻ってくると、急に死にたくなるときがあるから。私の場合は、自分がいなくなるとフミノが大変だと思えたのが、命綱になったんだけれどね」

確かに最初の頃のリディナと今のリディナは感じが違う。うまく表現できないけれど、今の方が柔らかい雰囲気だ。

「だから私は、セレスのその点については心配していないかな。私がもし心配するとしたら、セレスではなくフミノのこと。もしセレスにとっていい形での引き取り手がない場合、きっとフミノはこのパーティにセレスを入れて、一緒にやっていこうと思うはず。違うかな？」

リディナは、私が話を持ち出す前に、そこまで考えていたようだ。おそらくは私以上に。

リディナの話は、さらに続く。

「私も今は反対じゃない。むしろ賛成。でもこの調子でやっていって、この先大丈夫かなとは思うの。私もフミノに助けてもらったんだから、そんなことを思う資格はないのかもしれないけれど。フミノって見ていると本当に人がいい。人が嫌いとか怖いとか言っているくせに、誰かが困っていると助けようとするし」

いやリディナ、それは違う。私は人がいいから助けているわけじゃない。そもそも他人を助ける、なんてことをしているわけじゃない。

「でもフミノは、とっても強いけれど冒険者でしかない。領地持ちの貴族とか大商人とかではない。だからできることには限界がある。見える範囲にも限界がある。助けたいけれど助けられない、そんなときがいつか来るかもしれない。だから今のうちに聞いておきたいの。私たちができることなんて限られている。助けられる人より助けられない人の方が遥かに多い。それでも今のまま、誰かが困っていたら助けていくの？　どう思っているの？」

私は思い出す。アコチェーノにいたとき、リディナにこのままアコチェーノに留まるかどうか、考えるように言われたあの日を。

あのときに気づいたのだ。私は私がしたいようにやっていると。

私は人助けをしたいわけじゃない。私は自分がしたいようにやっているだけ。しかしどう言えば伝わるのだろう。真剣かつ必死に考えて言葉を並べて、動きにくい口に出す。

「私は他人を助けたいわけじゃない。私はリディナが思っている以上に、自分のことでいっぱいいっぱい。他人のことを考える余裕は全然ない。リディナがさっき話してくれたことだって気づかなかった」

難しい。うまく言葉にできない。でも言葉にしないと伝わらない。言葉に出さなくても分かってくれるなんて考えはただの甘え。だから必死に言葉を絞り出す。

立ち読みサンプル
はここまで

うまく言おうなんて考えない。どうせ私の対人能力ではそんなことはできない。とにかく伝わるように。リディナには伝わってほしいから。

「私はきっと、リディナが思っている以上に自分勝手で我儘。自分のことしか考えていない。自分のことしかわからない。他人のことまでわからない。他人がどう思っているかなんて、わからない。自分ではないから、わからない」

これはついさっき感じたことだ。リディナがどう感じていたか、私は全然わかっていなかったから。

さて、ここからが本題。どう言えば伝わるだろう。わからない。でもとにかく伝えなければ。

「私がやったことで、相手が助かったかはわからない。助かったと思ったかもわからない。自分じゃないからわからない。だから私の基準は、私がそうしたいと思うか思わないか。それが全て」

「でもそれならなぜ、そうしたいと思ったのかな？　私のときだって、まだ私がフミノの手伝いをするって言う前だよね。フィリロータのときだって、デゾルバ男爵領のときだって、フミノは見返りとか全く考えてなかったよね。それとも東の国に、そんな信仰か何かがあるの？　そうすれば救われるというような」

この質問なら簡単に答えられる。

「宗教は信じていない。神という存在そのものは実在する。あることがあって知っている。でも神がそうやって一人ひとりの行動を全部見て判断して、何かを決めているかどうかはわからないし、知らない。だからそれを判断基準にはできない」

さっきの質問のおかげで、次の言葉も出てくる。

「私が知っているのは自分のことだけ。自分がどうされるとどう感じるかだけ。飢えれば苦しいと思うし、怪我をすれば痛いと思う。病気になれば苦しいし、死ぬのは嫌だと思う。他人であっても、そういう状況は見たくない。見ると想像してしまう。痛いのを苦しいのを思い出してしまう。だから嫌だ。そういう状態を見たくないし感じたくない。それだけで、それ以上じゃない」

あと少し違う何かがあるような気がする。でも、うまく言えない。うまく言葉にできない。

つまり私がやっていることは他人のためじゃなくて、自分のためなのだ。そうか、このフレーズも入れておこう。その方がわかりやすい。

「だから私がやっていることは、他人のためじゃない。自分のため。自分がやりたいと思っているからやっているだけ」

これでやっと私が実際に感じていることの六割くらいだ。人に伝えるのはやっぱり難しい。

「つまりフミノは他人のためじゃなくて、自分のためにしているってことでいい？」

まさにその通りだ。頷きつつ返答する。

「そう。他人は自分じゃないからわからない。だから私が判断する自由があってした判断は、全部私がそのときそうしたいという理由で判断した。それだけ」

このことに気づかせてくれたのは、リディナだ。経緯は上手く説明できないけれども。

「でも私はおかげで助かったよ。フィリロータの村の人だって、アコチェーノのトンネルができたことだって、デゾルバ男爵領のことだって、助かった人は大勢いるし、喜んだ人も大勢いると思う。それでも単に自分のためにしたって言えるの？」